

歌における「や」の表現形式について

—— 万葉、古今、新古今を資料として ——

後 藤 良 雄

言語は時代の経過とともに少しずつ変化していくものであるが、その観点から助詞「や」の表現形式の変遷を万葉集、古今集、新古今集にわたって統計上から述べてみたい。故にここでは一首一首についての細かい論評は避け、全体の形式上からみた傾向について述べる。ただし「や」は疑問または反語を表わす用例のみを扱い、感動の用例は除くことにする。

終助詞としての「や」の用法

終助詞としての用法は、万葉四五二六首中二八三例、古今一一四〇首中五七例、新古今一九七九首中五四例ある。この用例中には一首中に二、三例を含む歌もあるし、長歌と短歌を同じ一首とみなすのは問題があるが、便宜上百首中における「や」の使用度数をみると、万葉では六・三回、古今では五回、新古今では二・七回となり、終助詞としての「や」の使用度数は次第に減少する傾向にある。

次に「や」の接続をみると、万葉においては活用語の已然形に接続する例が圧倒的に多く、終助詞「や」二八三例中二二二（七

百首中における「や」の使用回数

	万	葉	古	今	新	古	今
終止形+「や」		1.4		1.9			1.5
已然形+「や」		4.9		3.1			1.2
終助詞「や」		6.3		5			2.7

八・四%)を占めるが、古今では五七例中三五(六一・四%)となり、新古今に至ると五四例中二三(四二・六%)となる。これを各歌集について百首中の使用度数から見ると上表の通りである。すなわち、終助詞として使用される疑問反語の「や」は万葉から新古今に下るにつれて使用例が減少していくのであるが、その原因は「已然形」+「や」の型の著しい衰頽にある。

A 已然形に接続する「や」について

この中においてもつとも衰頽の著しいのは推量の助動詞「む」の已然形「め」+「や」の型で、万葉では

一六二もあつて終助詞「や」のうちの五七・二%を占めていたものが、古今では一〇例一七・五%、新古今では七例一三・〇%と激減している。

次に万葉一六二の「め十や」の中、多く用いられている表現は「恋ひめや」一八、「あらめや」一七、「忘れめや」九、「逢はざらめや」八、「逢はめや」六、「しかめや」五、「落ちめや」五などである。古今においては一〇例中「恋ひめや」「あらめや」「忘れめや」「逢はざらめや」各一で計四が、新古今においては七例中「逢はざらめや」一、「忘れめや」二で計三が、前述の万葉の表現法と一致する。万葉の「恋ひめや」から「逢はざらめや」までの四種の表現形式は、万葉にあつてはその数五二におよび「めや」一六二の三二%に相当する。それに比較して古今、新古今にあつては「めや」の用法が甚だ少ないのであまり重視することはできないが、前者にあつては全「めや」の四〇%、後者にあつては四三%を占めている。従つてこの様な表現形式がある程度慣用的に使われてきたことが考えられるのである。

次に「已然形十や」の型で考えられることは、推量の助動詞「らむ」の已然形「らめ」+「や」である。これは万葉においても数が少なく、「思ほすらめや」「召すらめや」「思ふらめや」しかなく、そのうち「召すらめや」が一首の長歌のなかに対句として四箇所使われている外は各々一にすぎない。それに対し古今五例、新古今三例はすべて「知るらめや」であつて明らかに固定してしまつてゐる事がわかる。従つて「らめや」の用法は万葉から古今に至る間に完全に化石化してしまつたものと思われる。

この他、万葉に比較的多く使われている「已然形十や」の型に「あれ十や」と「なれ十や」とがある。前者は万葉に二二例もあるが古今、新古今ではそれぞれ僅か二例にすぎない。万葉と古今においてとはとくに變つた点はみられないが、新古今では二例とも「いとまあれや」という表現形式となつてゐるので、新古今頃にこゝろした型で用いられるようになったのではないかと考えられる。後者は万葉に六、古今に一七、新古今に七あるが、とくに目立つた用法はみられない。

またサ変動詞「す」の已然形「すれ」+「や」が新古今に一つあるが、これは万葉卷十二の二九五四の歌と同じであるから、「すれ十や」はほとんど使用されなかつたと言つてよい。同じく新古今に動詞「なる」の已然形「なれ」+「や」が一例あるが、この場合は副助詞とみるべきであらう。

要するに「已然形十や」の表現法は万葉において二八種にも及ぶが、万葉時代に早くもその使用範囲は「めや」に限定されてきており、その他比較的優勢な「らめや」「なれや」「あれや」などの四、五種類の型が、ようやく古今、新古今にその退嬰的な形態を残したと言ふことができる。

B 已然形以外に接続する「や」について

已然形以外に接続する「や」は、万葉六二例中五二(八五%)、古今二二例中全部(一〇〇%)、新古今三七例中三〇(八三%)が活用語の終止形に接続する。活用語の終止形以外に接続した例は万葉に「隔てや」二例、「幸くや」一例の三例しかみられない。

「や」が接続する活用語でもつとも多く使用されているのは助動詞で、万葉四四例（已然形以外に接続する「や」の七一％）、古今一六例（同じく七三％）、新古今二二例（同じく五七％）である。次に多いのが動詞で、万葉一一例（二八％）、古今六例（二七％）、新古今九例（二四％）である。次は助詞で、万葉三例（五％）、新古今三例（八％）である。古今には助詞に「や」が接続する例はないが、万葉の例も「とや」三例中二例はかならずしも「とや」と訓読できるとは限らず、結局一例しか信じることができないので、古今とともに重視できないと言えよう。

この他、名詞、副詞に「や」が接続した用例が万葉四（六％）、新古今四（二一％）あるが、万葉は副詞接続はなく、すべて「形容詞語幹十み」への接続である。

それに比べ、新古今においては助詞「て」に接続するもの一、「と」には二、名詞に一、副詞三の合計七例の新しい接続法がある。この型は副助詞（保結び）の時に多く用いられている。試みに「て＋や」「と＋や」「名詞＋や」「副詞＋や」の副助詞としての数を挙げると、この僅か四種の型で万葉の副助詞の六七％、同じく古今の六〇％、新古今の六六％を占めてしまう。副助詞「や」の接続の種類は万葉十五種、古今二種、新古今二一種あるから、前述の四種の型がいかに多く使用されているかがわかるであらう。

要するに、このことは接続上において終助詞が副助詞的傾向を帯びてきていることを意味しているのではないかと思う。そのこととは疑問、反語の意味を表わす「や」全体からみると、副助詞と

しての用法は万葉においては三三％にすぎなかつたものが、古今では七四％、新古今に至ると八二％と著しく増大し、反対に終助詞的用法が激減することからも考えられる。

次に、終止形接続の「や」の用例においてとくに注目すべきものはない。強いて言えば万葉で二二例もあつた「べしや」は、古今では〇、新古今で一例と凋落したことであらう。すなわち、万葉においては「べしや」が終止形接続の「や」の二〇％も占めていたのに、ほとんど〇％になつたのである。それに対し「すや」は万葉で「べしや」と同じ二〇％の占有率を示しているが、古今、新古今でも一四％と根強い使用率を保っている。また「ましや」は万葉で一・六％にすぎなかつたが、古今で二七・三％に達し、新古今でも一九・四％と全般的に弱体化していく終助詞「や」の中にあつてかなり広く使われている。その他では「あれや」が、万葉二二例（終助詞「や」の四・二％）、古今は「あれや」二、「ありや」一計三例（五・三％）、新古今に至ると「あれや」二、「ありや」四計六例（一一・一％）となる。すなわち、「あれや」から「ありや」へ転換しながら、広く使用されるようになったことがわかる。

C 終助詞「や」の意味について

終助詞「や」の意味は、万葉においては二八三のうち二三七までが反語と考えられる。故に反語としての使用率は八四％になる。しかも「已然形＋や」に限定すると二二二のうち二〇七までが反語と考えられるので、反語としての使用率は実に九三・二％

に違する。とくに著しいのは「めや」で、一六二例すべて反語である。また、「らめや」「けめや」も数は少ないがすべて反語である。この三種の型は古今に一五あり、新古今にも一〇あるが、万葉と同じく一〇〇％反語として使用されており、これらの型に伝統的な拘束力が強く働いているとみるべきである。

なお「終止形+や」の用例であるが、これと同様に考えられるものに「ましや」がある。この型は万葉に一、古今に五、新古今に七あるが、これもすべて反語になっており、形態上においても、古今、新古今に各一の例外があるほかは『未然形+ば』……『ましや』の型に固定してしまっている。

これらと対照的なのが「なれや」と「あれや」である。「なれや」は万葉六例のすべてが反語であるが、古今では一七例のうち反語は三、新古今では八例中反語は零である。「あれや」も、万葉では反語と考えられるものが一二例中一〇あるが、古今、新古今では全部疑問である。

終止形接続の型では「すや」の場合、同様の傾向がみられる。すなわち、万葉十二例中反語と考えられるもの九あるが、古今では三例中、反語はない。新古今でも五例中、反語は一例のみである。

これと趣を逆に行っているのが「きや」である。反語と考えられるものは、万葉は八例中〇であるが、古今では二例中全部が、新古今でも六例中五までである。

要するに、「めや」「らめや」「けめや」「ましや」が保守的で、形態上においても、またその意味においても変化し難いの

は、「推量+疑問」によつて、おのずから型がきめられてしまふからであろう。それに対し、「なれや」「あれや」「すや」「きや」が、「にけらずや」(万葉一二例中三)、「いはせずや」(同十二例中三)、「知らずや」(古今三例中三)、「見えきや」(万葉八例中五)、「思ひきや」(右今二例中二、新古今六例中三)などと多くの類型を持ちながらも、「推量+や」ほど化石化せず、意味においても変化していくことができたのは「推量+や」ほどの拘束力を持たなかつたためと考えられる。

要するに、疑問、反語の助詞「や」は、万葉において終助詞として六七・八％も使われて副助詞を圧倒していたが、古今時代にはすでに主客転倒して終助詞としての用法は僅かに二五・五％になり、新古今に至ると一七・六％へと激減する。その中でとくに凋落の甚しいのが「已然形+や」の型で、古今集に化石化した姿を僅かに残すだけである。それにひきかえ、活用語の已然形以外に接続する「や」は数字上は減少していないように見られるが、新古今集になると助詞、名詞、副詞などに接続するものが出てきて、かなりの率を占めるようになる。これらは保結びの助詞(副助詞)に接続が似ており、終助詞の副助詞化的倒向(質の変化)と考えられるが、事実新古今集にあつては「や」全体の八二・四％を保結びの助詞が占めるほど成長している事も、終助詞の副助詞化を証明していると云えるであろう。

備考 万葉集は万葉集大成の索引を使用した。調査に際しては日本古典大系本を参考にしたが、古今集は古今集総索引(明治書

院)を参考にしたので歌数が僅かではあるが増えている。

A 已然形に接続する「や」

助動詞

め

万葉 二一・三一・四六・一一〇・一九五・二四三・二四
 七・三〇一・三三一・三四五・三四六・三四六・四〇
 〇・四〇二・四一〇・四三八・四四七・四九一・五八
 二・五九五・六四三・六六四・六七三・六七九・六八
 一・六九六・七四七・七六三・七七一・八〇三・八一
 二・八四七・八五八・八七八・九二一・九三一・九三
 七・一〇一〇・一一〇六・一二五四・一二六八・一二七
 九・一三一二・一三三四・一三二八・一三五〇・一三五
 八・一三八四・一四二五・一四六一・一四八二・一五一
 〇・一五三一・一五九五・一六五三・一七六〇・一七六
 二・一七七〇・一七八九・一八〇五・一八〇七・一八一
 三・一八三五・一八八〇・一八九二・一九一七・一九二
 九・一九三一・一九八五・一九九五・二〇八八・二一二
 〇・二二四三・二二五五・二二六五・二三〇〇・二三三
 五・二四五一・二四六九・二四七七・二四九六・二五〇
 九・二五三〇・二五三八・二五六八・二五九八・二六〇
 〇・二六〇二・二六一一・二七四七・二七七三・二七八
 四・二七九七・二八〇五・二八三三・二八三五・二八四
 三・二八五七・二八五九・二八七〇・二八七三・二八八
 二・二八九一・二九〇四・二九〇九・二九五七・二九六

五・二九七三・二九七八・三〇二一・三〇五九・三〇八
 一・三一二〇・三一二四・三一五二・三二二八・三二八
 〇・三二八一・三二八三・三二八七・三三六〇・三三六
 〇・三三八六・三四八四・三五〇三・三五〇八・三五八
 三・三五八五・三六九一・三七三一・三七四一・三七五
 二・三七六三・三七九二・三七九三・三八六九・三八七
 七・三九六八・三九七〇・三九七三・三九九三・四〇〇
 〇・四〇一一・四〇五一・四〇五二・四一〇六・四一〇
 九・四一一五・四一三七・四一四五・四一七五・四一八
 七・四二二三・四二三三・四二三五・四二四八・四四三
 八・四四五〇・四四五八・四四八一・四四九七・四五〇
 七

古今 二六八・四二五・五八二・六六三・六七四・六九
 九・七〇四・七二三・七七二・一一二〇
 新古今 二一・一八二・一〇二五・一〇二九・一三六〇・
 一七二四・一八六三

らめ

万葉 三六五七・三八八六・三八八六・三八八六・三八八
 六・三九四九
 古今 四八五・五〇四・五〇五・六〇四・七三五
 新古今 三九・一〇八六・一八五二
 けめ(古今・新古今なし)
 万葉 一三五五・三二二〇
 じ(古今・新古今なし)

万葉 三四六四

なれ

万葉 二三・四二九・一三九四・二四四四・二五六九・四

一六四

古今 二二五・二四八・三二九・五〇七・五〇九・五三

八・五六〇・五九一・六二七・六七一・七五三・八四

三・九二四・九三〇・九三一・九八四・一〇四五

新古今 二五二・六二五・九三九・一〇一九・一〇四〇・

一三四九・一四五二・一八八〇

たれ(古今・新古今なし)

万葉 一七八二

ぬれ(新古今なし)

万葉 一四六八

古今 四二三

ざれ(古今・新古今なし)

万葉 七九一

いかなれ(万葉・古今なし)

新古今 八〇四・一六三一

動詞

すれ(古今なし)

万葉 二九五四

新古今 一六〇八

あれ

万葉 三二・九四三・一三六八・一五〇一・一六八八・一

六九八・一七八三・一八〇九・一八八三・一九八八・三

六三三・四一一三

古今 七五八・九七六

新古今 六七・一〇四

恋ふれ(古今・新古今なし)

万葉 一八二二・三〇九二

過ぐれ(古今・新古今なし)

万葉 六二三

知るれ(古今・新古今なし)

万葉 五九一

知れ(古今・新古今なし)

万葉 一九六

逢へ(古今・新古今なし)

万葉 四一七・四二五

言へ(古今・新古今なし)

万葉 七七八

行け(古今・新古今なし)

万葉 一六八二

問へ(古今・新古今なし)

万葉 二五一六

継げ(古今・新古今なし)

万葉 二八四九

飲め(古今・新古今なし)

万葉 二九二五

立て (古今・新古今なし)

万葉 一一六二

許せ (古今・新古今なし)

万葉 一一九三

降れ (古今・新古今なし)

万葉 二五一一

念へ (古今・新古今なし)

万葉 六八・一九八・一九九・四九〇・五〇二・一一二〇

二・一三二六・二〇二〇・二四一〇・二六三八・三〇〇一

三・三六〇四・四〇二〇・四〇四八

なれ (万葉・古今なし)

新古今 一六〇八

形容詞

なかれ (古今・新古今なし)

万葉 四二二六

恋しけれ (古今・新古今なし)

万葉 四一一八

B 已然形以外に接続する「や」

助動詞

べし (古今なし)

万葉 一七・一八・七一・五八五・一二五七・一七八一・

一九九八・二〇一七・二〇三三・二〇七九・三〇九八・

三三四六

新古今 九〇八

まし

万葉 一四九七

古今 六三・一〇七・一一八・六七九・七九六

新古今 一四二四・一四三七・一五三二・一五七九・一六

〇四・一七三一・一七三三

む (新古今なし)

万葉 一三五〇・一七七四・二四八九・三七三五

古今 三六七・四二四・一一二四

ず

万葉 二〇・一六〇・二二一・二二四・四二四・八一七・

八二九・九一二・一四五七・二七〇六・三二五〇・四〇

八〇

古今 二二三三・五三三・九五七

新古今 一四〇・一一九五・二二五五・一六五三・一八九

七

つ (古今・新古今なし)

万葉 一九七六・三八八〇・三八八〇・四一三八

ぬ (万葉なし)

古今 一〇二五

新古今 一二七

き

万葉 四六〇・七一六・一五〇六・一九九六・二八二二・

二八七四・三一一一・三二六八

古今 九六一・九七〇

新古今 七七六・七七七・九八七・一三〇一・一五二九・

一六三八

けり (万葉なし)

古今 一〇四二・一〇四二

新古今 一〇〇六

り (古今・新古今なし)

万葉 二二六七・二四〇八・二八〇八

動詞

あり (万葉なし)

古今 四一一

新古今 九〇八・一一九五・一六四一・一六九二

見る (万葉・古今なし)

新古今 一五一八

隠る (万葉・新古今なし)

古今 三三六

出づ (万葉・古今なし)

新古今 一四〇七

見ゆ (古今・新古今なし)

万葉 三七九六

思ほす (古今・新古今なし)

万葉 三三三〇

給ふ (古今・新古今なし)

万葉 一九六・一九六

思ふ (古今・新古今なし)

万葉 九五五・三三〇九

聞く (古今・新古今なし)

万葉 一九四二

聞かず (古今・新古今なし)

万葉 二一五六

飽く (万葉・新古今なし)

古今 四六八

摘む (万葉・新古今なし)

古今 一〇三一

知る (万葉・古今なし)

新古今 九八三・一五四九

散る (万葉・古今なし)

新古今 一六五三

隔て (古今・新古今なし)

万葉 一三二〇・二六四七

形容詞

なし (万葉・新古今なし)

古今 四一一

あさまし (万葉・新古今なし)

古今 一〇五〇

幸く (古今・新古今なし)

万葉 六四八

名詞

繁み (古今・新古今なし)

万葉 六八五

無み(古今・新古今なし)

万葉 一八〇四

遠み(古今・新古今なし)

万葉 七六七・一〇五八

涙(万葉・古今なし)

新古今 七九四

副詞

今(万葉・古今なし)

新古今 一五五八・一八五八・一八五八

助詞

と(古今なし)

万葉 一九一七・二二六二・二三七〇

新古今 一〇四九・一二九九

て(万葉・古今なし)

新古今 六〇四

新刊紹介

伊地知鉄男編著 「日本古文書学提要」上巻

本書は、書誌学・文献学・古文書学を総合して、ビブリオロジー本来の方法を駆使し、その機能を十分に生かしている点、まさに本格的な古文書学入門書といふべきものである。ことに、史学・国文学における各時代の問題点と主要文書との関係を、豊富な図版・写真及び詳しい事例解説によつて、構造的・統一的に解明を与えていることは、類書にない画期的な特質であり、多年宮内庁図書調査官として、活躍された著者にして、はじめて得ることといえよう。

〔主な内容〕

第一部 古文書学概説

書誌学 書誌学概説 形紙 形態(写本・板本) 保存・伝来

文献学 文献学概説 原作と書写の様態 本文批判(異文・誤写・底本・校合など)

古文書学 古文書学概説 様式と形状(用紙・形式・花押・印章) 記録(公私日記類)

第二部 古文書・記録の様式

古代の文書 公文書(公式様文書・内文書・官文書) 令外文書

(内文書・院庁文書・官文書) 公家文書(政所下文・勸学院政

所下文・御教書・長者宣) 社寺文書(機構・準公文書・資財・

法制・出家・師資相承・修善・行事など各文書) 古代の記録

(日記・その内容の検討など)

中世の文書 武家文書(鎌倉時代) 機構と古文書・支配文書・

所領安堵文書・訴訟裁許文書・上申文書(室町時代) 機構と古

文書・支配文書・守護文書・幕府法・国人領主文書(戦国時

(以下九一ページへ)